

『 On-line みんなで法華經を学ぼう! 』 vol.6

Sep.2022

—— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .
(みんなで“法華經觀”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華經 方便品 第二 〈前半〉』 (迹門・正宗分)

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も

隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』(法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習學せざる者は、此れを曉了すること能わじ』(方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくこ

とを得たりと知れ』(法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、
りっぱな精進といえる』(『新釈法華三部經 第一卷』 P8・8行/P5・1行)

※ 表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇨ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



<序品の復習>

・「サッダルマ・プンダーリーカ・スートラ」《妙法蓮華經》—— 「①俗世のなかにいながら、現象の移り変わりに迷わされず、②仏の大慈悲のまにまに正しく生き、③自分の人格を完成しつつ、世の中を完全平和な理想境につくり上げてゆく道を教え、しかも、④人間は誰でもそれができる本質を平等に持っているのだということを説いた、この上もなく尊い教えだ」と定義できます。

(P18・終3行/P12・終2行)

・梵文学の本田義英京都大学教授は——「プンダーリーカ」は、人間のなかの白蓮華である「菩薩」を意味する。—— かみ砕いて言えば、(菩薩とは…) <①目の前の現象にとらわれず、②小さな我に執着せず、③ものごとの実相を正しくみることによって、④全ての人間は本質において平等であることを達観し、⑤そういう観(み)かたにもとづいて人を救い世を救う行ないに挺身する人>。それがプンダーリーカすなわち白蓮華の意味だということです。

(P17・6行/P12・1行)

・『是の如きを我聞きき』

- ・〈自利・利他〉〈自覚・覚他〉—— 自らを引き上げる修行をしながら、他をも引き上げる行いに挺身する… 他を引き上げる力をつけるために自らを引き上げる… これこそが大乗仏教徒の正しいありかたです。〈自利・利他〉〈自覚・覚他〉これが大乗仏教徒の正しいありかたです。
- ・自由自在 — ものごとにとらわれ執着する心をすっかり除き尽くしている状態。～ 心が現象へのとらわれから解き放たれておれば、悩みもなければ、苦しみもない、自由自在な心境にいられます。 (P36・2行/P25・終4行～) 『有結を盡くして、心自在を得たり』 (三七頁 三行)
- ・ですから、〈『人間の幸、不幸を計る尺度』というものは、現象への『とらわれから、どれぐらい離れることができるか』というその度合いである〉と定義できましょう。 P36・2行/P25・終4行～)
- ・善行が徳の本 — 善い行いをすることは善い心を育てるものであり、「仏の悟り」を得る根本。どのような教えでもよい、だれの教えでもよい、善いことはどしどし実行してゆくこと、これが、《人格完成の根本の道》。 (P47・終2行/P34・7行～)
- ・『此土の六瑞』 — 「真理を説く」ことは勿論ですが、「真理を聞く」というのも同じように尊く、賛嘆され供養されるべき事なのです。ですから、仏法を聞き、仏法を学ぶ者は、常に天地に賛嘆されているのだという自覚と自信を持たなければなりません。 (P89・3行/P64・8行)
- ・『他土の六瑞』 — (P105・終4行/P76・4行)
- ・四諦 — 苦諦・集諦・滅諦・道諦 (P183・4行/P136・6行)
- ・正とは — 「正しい」というのは、〈真理に合った(①自分本位にものをみない。②一方に偏った見方をしない)〉ものであり、〈調和のとれた〉ものであり、〈目的に合った〉もの。 (P192・終4行/P142・終4行)
- ・弥勒菩薩 — 未来世に出現されるであろう仏として、この世に実在した人物・弥勒比丘を指定されたことには、じつに重大な意味が含まれていると思います。すなわち、《この娑婆世界を救うのは、娑婆世界に生まれた人間でなければならない》ということです。 (P54・1行/P39・1行)
- ・弥勒菩薩の前身は、「自分中心・執着心強い・教えを聞いても理解できず・しかもすぐ忘れる・自分の名声を求める」という『求名・ぐみょう菩薩』 (P227・終行/P169・8行) (五一頁 六行) 『諸の善根を植えたる因縁を以ての故に、無量百千萬億の諸佛に値いたてまつることを得て』
- ・宗教協力と仏教 — お釈迦さまは、古来のバラモン教の信仰を排斥しようとはなさいませんでした。そういった神々をも仏法の中に包容し、仏法によってそれらに新しい意味を与えられたのです。 (P62・終1行/P45・終2行)
- ・三昧 — 一切の雑念を断ち切り、ある〈善き思い〉〈正しい教え〉に全精神を集中し、その一念が長い間、切れ目なく続いている状態、これが三昧なのです。その方法として、むかしの高僧たちは、〈二念をつぐな〉ということと、〈雑念を相手にするな〉と言うことを教えています。～とっさに唱題または読経の声を強めるなり、口の中に唱えていたのなら声に出してみるなりして、心の唱題または読経そのものへ返してしまえばいいのです。 (P77・5行/P55・終3行)
- ・慈と智の共同作業 (P109・終4行/P79・終3行)
(弥勒菩薩が文殊菩薩に対して質問するのは・・・)
第一に、一切の人間に代わって質問するということは、つまりその人たちに法の布施をしたいという慈悲の現われです。～
第二に、〈慈悲〉が〈智慧〉に呼びかけたということになります。〈慈悲〉の呼びかけに応じて、〈智慧〉が発動するのです。
- ・回向 自分が受けるべきものを他へふり向けること。 (P136・2行/P100・2行)
※『回向』とは： 言い換えると「人に花を持たせる」ことだとも言える。

・五神通

(P142・終5行／P104・終5行～)

＜天眼通・てんげんつう＞… 普通の人に見えないものを見通す能力。

※ 物事を自分中心にとらえず、「客観的」に洞察できること。

＜天耳通・てんにつう＞… 普通の人に聞こえない音や声を聞くことのできる能力。

※ 相手の言葉に引きずられず、自我にとらわれないで「客観的」に聞く。

＜他心通・たしんつう＞… ひとの心をすっきり見通す能力。

※ 相手の立場になり切れば、自然と解ってくる。

＜宿命通・しゅくみょうつう＞… 前の世のことまで知ることのできる能力。

※ その人が、そこに至るまでの経緯（例・成育歴や置かれた環境）に思いを寄せて考えること

＜神足通・じんそくつう＞… すばらしい速さで、どんな所へでもいける能力。

※ 相手の事を思うと、居ても立っても居られず、すぐ飛んで行くこと。

・仏の十号 如来・応供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊

(P179・3行／P133・7行)

・八正道 正見・正思・正語・正行・正命・正精進・正念・正定

※ 『八正道』と会長先生が説く『三つの実践』「おはようございます」「ハイと返事」

「履物、椅子を揃える」

(P192・7行／P142・終7行) (P209・6行／P154・3行)

・我を捨てる功德

『諸の善根を植えたる因縁を以ての故に、無量百千萬億の諸佛に値いたてまつることを得て、供養・恭敬・尊重・讃歎せり』 (五一頁 六行)

日常生活に「善行」を積んでいるうちに、だんだん心が美しくなり、名利（みょうり）を求め
る気持ちが薄らいでゆきます。そうすると、いろいろな「いい教え」がズンズン心に入ってきます。～ その教えに感謝し、実践し、心から尊び敬ってゆくうちに、その人の人間性はますます磨かれてゆくのです。

(P228・終2行／P170・4行～)

・諸仏には会い難し

『諸佛には甚だ値いたてまつり難し 億劫に時に一び遇いたてまつる』 (五四頁 七行)

仏さまの世に出られた時代に生れ合わせ、そして仏さまの教えを直接うかがうということは、よほどの幸運に恵まれない限りでることではないということです。 (P244・終5行／P184・1行)



＜方便品（前半）のあらすじ＞

【五七頁一行】『爾(そ)の時世尊、三昧より安詳(あんじょう)として起(た)って舍利弗に告げたまわく』その時、無量義処三昧(むりょうぎしょざんまい)という三昧に入っておられた釈尊は、三昧を終え、静かに目を開かれました。そして厳かに立ち上がられ、誰からの質問も待たずに自ら口をお開きになり、舍利弗(しゃりほつ)に向かって語り始められたのでした。

【『無問自説』 誰からも請われることなく、世尊が自ら説法を始められる】――

世尊(釈尊)が、突然お言葉を発せられました。

【五七頁一行】『諸佛の智慧は甚深無量なり、其の智慧の門は難解難入(なんげなんにゅう)なり』

「仏の『智慧』は大変奥深く、『真理』はあまりにも深淵であるために、ふつうの人々には真理の内容を理解するは困難です。／（『一切の聲聞・辟支佛（びやくしぶつ）の知る事能（あた）わざる所なり』）しかも、声聞や縁覺の境地にいる全ての者も、真理の意味を正しく理解することができません。仏はこれまでに無数の仏から教えを受け、数々の修行と努力を尽くしてきました。しかも様々な困難や、湧（わ）き起る全ての煩惱にも打ち勝ち、ひたすら仏の境地に向かって精進してきました。そしてついに、深淵な『真理』を悟ることができ、あらゆる人々から仰（あお）ぎ見られる身となったのです」

【『随宜説法・ずいぎせっぽう』（「随宜所説・ずいぎしよせつ 対機説法」）】——

【五七頁五行】（『甚深（じんじん）未曾有（みぞう）の法を成就して、宜しきに隨（したが）って説きたもう所、意趣（いしゆ）解（き）り難し』）「その深淵な真理を悟った仏は、その真理をこれまで、相手の機根に応じて適切に説き分けてきました。それを『随宜説法・ずいぎせっぽう / 随宜所説・ずいぎしよせつ』と言います。しかし教えを聞く者は、それぞれに応じて説かれる真理の真意というものを、なかなか正しく理解することができずにいます」

【五七頁 六行】「舍利弗よ。私が悟りを得てから今日まで、様々な過去の事例や譬えを用いて法を説いてきました。それは人々を『執着』の苦悩から離れさせるためのものであって、なぜそれが出来たのかというと、／（『如來は方便・知見波羅蜜（ちけんはらみつ）、皆已（みなすで）に具足せり』）それは私が、『方便』と『智慧』の両方を完全に具えているから可能であったのです」

【五七頁 終三行】「舍利弗よ。仏の『智慧』は非常に広大で奥深いものです。仏は宇宙全体のあらゆるものごとを知り尽くし、遠い過去からはるか未来のことまでを見通しています。そればかりか、『慈・悲・喜・捨』の『四無量心』という人々に福を与える大徳を具えています。そして何事にもとらわれない『完全なる自由自在』な『四無碍・しむげ』の境地を得ています。そして、何者に対しても恐れずに法を説くことができる『四無畏・しむい』という徳力も具えています。心は散乱することなく完全に『苦』から抜け出して解放されており、今まで誰も知ることができなかった『真理』を完璧に悟っているのです」

【五七頁 終行】「舍利弗よ。仏というものは相手の機根と場合に依じて、様々な説き方を変えて巧みに教えを説きます。／（『言辭柔輭（ごんじにゅうなん）にして、衆の心を悦可（えっか）せしむ』）しかも、言葉を噛みくだいて相手に判りやすく説き、それによってその人に『よろこびと満足感』を与えるのです」

【『三止三請・さんしさんしょう』】——

【五八頁二行】ところがここまでお説きになると、世尊は突然、黙りこまりました……。
（『止（や）みなん、舍利弗、復（また）説くべからず』）「やめよう舍利弗。真理を説いても誰も解るものではない。だから説くのはやめよう。なぜならば『真理』は稀有で最高の教えであり、それは仏と仏との間でしか理解できないものです。ふつうの人間では到底理解できるものではありません。『真理』とは、この世の実相を説き示したものであり、それは『相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等』という作用と関係で成り立っていることを示しています。これを『十如是』と言います。仏はこの『真理』を悟ったのであります。

——【『略法華』】 《止》❶

【仏が悟る『真理』の難解さを、重ねて「偈」で説く】——

【(偈) 五八頁 六行】世尊は以上のことを重ねて強調するために『偈』をお説きになりました。

「宇宙のあらゆる者が、仏の『真の存在・はたらき』を理解しようと思っても、それは計り知れなく大きいために、正しく理解をすることはできません。仏の存在とは極めて深淵なもので、その仏に私が成れたのは、遠い過去世で無数の仏に従い、説かれる教えを完全に実践し尽くしたからです。気の遠くなるような長い年月をかけて精進し、そしてその後、ブツガヤーの菩提樹下にて、『真理』を悟ることが出来たのです」

【(偈) 五九頁 二行】『是(こ)の法は示すべからず言辭(ごんじ)の相寂滅(そうじゃくめつ)せり』「私が悟った真理の内容は、文字にも言葉にもあらわすことが出来ません。ですから、仏以外の者が知り得ることは出来ません。／『諸の菩薩衆の信力堅固なる者をば除く』しかし、信ずる力が堅固で、実践の決意が強い菩薩たちだけは、この真理を理解することが出来るでしょう」

【(偈) 五九頁 五行】「一切の煩悩を除くことが出来た境地にいる者や、／『皆(みな)舍利弗の如くにして思(おも)を盡(つ)くして共に度量(たくりょう)すとも佛智を測ること能(あた)わじ』世界の全ての人が『智慧第一』の舍利弗のような賢者ばかりであったとしても、仏の『智慧』と『真理』を正しく知ることは出来ません。また、聡明な智慧を持ち、煩悩と迷いを除き尽くした縁覚の境地の者が、竹林の竹のように無数に集まり、しかも無限の時間をかけて仏の『智慧』の真実を知ろうとしても、その一部分さえも知り得るものではありません。同様にガンジス河の砂の数ほどの無数の菩薩が集まり、一心になって思索を深めても、理解できるものではありません」

【(偈) 六〇頁 五行】「舍利弗よ。是非、つぎのことを知っておかなければなりません。よいですか、／『諸佛は語(みこと)異(ことな)ることなし』諸仏の教えは、本質に於いて全く違ひはないのです。心の底から信じなさい。仏は長い時をかけて『方便』の教えを説いたのち、必ず『真実』の教えを説き示すものです」

【(偈) 六〇頁 七行】「声聞や縁覚の境地にいる全ての者たちよ、よくお聞きなさい。仏は皆さんを煩悩や執着の苦しみから解き放ち、大安心の境地を得させるために、／『佛方便力を以て示すに三乗の教を以てす』『方便』として『三つの教え(三乗の教)』を説き分けて示してきたのです。なぜそうした『三つの教え(三乗の教)』を『方便』として説いてきたのかと言いますと、それは人々がそれぞれ違った『煩悩と執着』を持っているために、まずはその『煩悩と執着』から引き離す必要であったためです」
——【『三乗方便』】

【釈尊の制止に、一同が疑問を持つ】——

【(六〇頁 終二行)】すると、そのお説法を聞いていた憍陳如(きょうじんによ)をはじめとする声聞や聖者たち 1200 人。そして声聞や縁覚の境地を求める者たちは、釈尊が今説かれたことの真意を理解できずに、次のような疑問の心を持ちました・・・。

【(六一頁 一行)】『今者(いま)世尊、何(なん)が故(ゆえ)ぞ慍懃(おんごん)に方便を稱歎(しょうたん)して、是(こ)の言(みこと)を作(な)したもう』「なぜ世尊は今、『方便』というものをこのように強調して讃えるのであろうか？ しかも『仏の悟った法(真理)』は大変奥深く難解であるために、声聞や縁覚の境地の者には理解できず、知ることすらできない』などとおっしゃるのであろうか？」

【六―頁三行】「仏さまはこれまで、声聞、縁覺、そして菩薩に対して、解脱に達する『道』をお示しくださり、そのお陰で煩惱を除くことができ、平安の境地を得ることができたではないか。しかし今になってなぜ、世尊は『お前たちは真理を理解することができない』などとおっしゃるのであろう？ 世尊のご真意というものが我々には理解できない」と、世尊のお心を測りかねずに困惑したのでした。

【一同の心に疑問が生じたことを察した舍利弗が、釈尊に法を説くことを請(こ)う】――

【六―頁 五行】【(偈)六―頁 終行】その時、一同が疑問を持っていることに気付いた舍利弗(しゃりほつ)は、自身もまた世尊のお言葉に疑問を抱いていましたので、世尊にそのことをお尋ねしました。

（『慧日大聖尊(えにちだいしょうそん) 久しくあって乃(いま) し此の法を説きたもう』）「太陽のように全てを照らし出す智慧をお持ちの世尊よ。世尊はなぜ『方便』の大切さを繰り返して讃歎されるのですか？ 私はずっと昔から世尊の御許(みもと) で教えを頂戴していますが、今までにこのような教えを伺ったことはありません。／（『佛我を第一なりと説きたもう我今自ら智に於て疑惑して了(さと) ること能(あた) わず 是(こ) れ究竟(くきょう) の法とや爲(せ) ん 是(こ) れ所行(しょぎょう) の道(どう) とや爲(せ) ん』）世尊は私のことを『智慧第一』とおっしゃってくださいましたが、その私の智慧を以ってしても、世尊が今ここでおっしゃてられている真意が理解できせん。疑いと戸惑いを感じるばかりです。自分が習得したこれまでの教えというものが、『究極の教え』であったのか、それとも修行の道の『一段階にすぎない教え』であったのか・・・、ただただ迷い、悩むばかりです。今ここにいる者たちもまた、私と同じように疑問をいただき、／（『今皆(いまみな) 疑網(ぎもう) に墮(だ) しぬ』）疑念の網の中から抜け出せないでいます」

【(偈)六二頁 六行】（『相視(あいみ) て猶豫(ゆうよ) を懷(いだ) き 兩足尊(りょうそくそん) を瞻仰(せんごう) す』）

「世尊よ。見てください。ここにいる者たちは、皆、お互いの顔を見合わせて、この疑問をどうしたらよいのか戸惑い、この疑問を仏さまにお晴らし頂きたいと世尊をじっと仰ぎ見ております。どうか世尊よ。お願いですから私どもの疑問をお晴らし願います。

【六―頁 八行】（『唯(ただ) 願わくは世尊、斯(こ) の事を敷演(ふえん) したまえ』）【(偈)六二頁 終三行】（『願わくは微妙(みみょう) の音(みこえ) を出(いだ) して時に爲に實(じつ) の如く説きたまえ』）「どうか、世尊のご真意をお教え下さい。お願い申し上げます」と、舍利弗は、心の底から仏さまに懇願したのでした。

《**請**》①

【しかし、仏は『真理』を説くことを再び制止する】――

【六三頁 三行】すると世尊は、こうおっしゃられました。

（『止(や) みなん止(や) みなん、復(また) 説くべからず 一切世間の諸天及び人(にん)、皆當(みなまさ) に驚疑(きょうぎ) すべし』）「いや、やはり止(や)めておこう。それを説明すると、天上界の人を含め世の全ての人たちは、かえって多くの疑念を持つことになります。だから私の『真意』を説くのはやめましょう」と、舍利の問いにお答えになりませんでした。

《**止**》②

【しかし、再び舍利弗は、釈尊に法を説くことを願い出る】——

【六三頁五行】【(偈)六三頁終三行】世尊のお言葉を受け、舍利弗が再び仏さまに願い出ます。

「世尊よ。どうぞお説きください。この座にいる全ての者たちはみな、これまで長い間、仏さまの教えを頂いて精進をしてきた者たちばかりです。みんな機根が優(すぐ)れており、素晴らしい智慧を持っている者たちばかりです。全員が仏さまのお言葉を心から敬い、信じる事が出来る者たちであります。ですから、どうぞ世尊のご真意をお説きください。お願い申し上げます」

《言青》②

【ところが仏は三度(みたひ)、『真理』を説くことを制止する】——

【六三頁終行】しかし仏さまは、舍利弗の願いを断られたのでした。

(『止(や) みなん舍利弗、若(も) し是(こ) の事(じ) を説かば〜 皆當(みなまさ) に驚疑(きょうぎ) すべし。増上慢の比丘は將(まさ) に大坑(だいきょう) に墜(お) つべし』) 【(偈)六四頁 三行】 (『止(や) みなん止(や) みなん説くべからず我が法は妙にして思い難し 諸(もろもろ) の増上慢の者は聞いて必ず敬信(きょうしん) せじ』) 「いや、止めよう。舍利弗よ、もしこの仏の『真意』を説けば、あらゆる者たちは驚き悩むに違いありません。しかも増上慢の者は、かえって地獄に落ちることになってしまいます。だから説くのは止めておこう」と、お答えになりませんでした。

《止》③

【それでもなお舍利弗は、三度(みたひ)釈尊に法を説くことを願い出る】——

【六四頁五行】【(偈)六四頁終三行】ところが舍利弗(しゃりほつ)は諦めません。三度(みたひ)世尊に重ねてお願いをするのでした。

(『世尊、唯願(ただねが) わくは之(これ) を説きたまえ、唯願(ただねが) わくは之(これ) を説きたまえ』)

「世尊。どうかお願いですからお教え下さい。幾重にもお願い致します。／ (『吾(われ) は爲(こ) れ佛の長子(ちやうし) なり』) 私は仏さまの第一の弟子であります。しかも今ここにいて一同は、生まれ変わり死に変わりして仏にお仕えし、教化されてきた者たちばかりです。世尊のみ教えを心から信受する者たちです。世尊がお教えくだされば、／『長夜(ちやうや) 安穩にして饒益(にやうやく) する所多からん』 みな長い闇路(やみじ) から抜け出すことができ、人生を安らかにし、幸せを得ることが出来るようになります。／ (『皆(みな) 一心に合掌して佛語を聴受(ちやうじゆ) せんと欲す』) 世尊よ。みんな一心に合掌して世尊の言葉を待ち望んでおります。どうか世尊よ。世尊のご真意をお教え願います」と必死に懇願したのでした。

《言青》③

——【三止三請・さんさんしょう】

・・・こうした世尊の三度の「制止」と、舍利弗の必死の三度の「懇願」が繰り返されました。

【舍利弗の熱心な求道を受け、ついに釈尊が『真理』を説きはじめる】——

【六五頁四行】そしてついに、舍利弗の必死な求道の熱意に心打たれた世尊は、その願いをお聞き入れになり、いよいよ法を説かれようとなされました。

(『汝(なんじ) すでに慇懃(おんごん) に三たび請(しょう) じつ、豈(あ) に説かざることを得んや。汝(なんじ) 今(いま) 諦(あきら) かに聴(き) き、善(よ) く之(これ) を思念せよ。吾當(われまさ) に汝(なんじ) が爲(ため) に分別し解説(げせつ) すべし』) 「舍利弗よ。そなたは三度にわたり私に『真理』を説くよう

に熱心に願ってきました。そなたの熱意には驚かされました。わかりました。それでは、そなたのために、仏が悟った『真理』を説きましょう。舍利弗よ。よく聞くのです。しっかりと受け止め、思念を深めて自分のものとしなさい」

【すると突然、五千人の衆が立ち去って行く】——

【六五頁六行】しかし、世尊がこれから『真理』を説かれようとした、まさにその時・・・。

（『五千人等あり。即（すなわ）ち座より起（た）って佛を禮（らい）して退（しりぞ）きぬ』）その座にいた出家・在家の修行者たち5千人が突然立ち上がり、世尊に向かって『一礼』して、その場から立ち去って行ったのでした。

【六五頁八行】（『此（この）輩（ともがら）は罪根深重（ざいこんじんじゅう）に及び増上慢（ぞうじょうまん）にして』）じつはこれらの者たちは『業（ごう）』が深く、『増上慢（ぞうじょうまん）・憍慢（きょうまん）』であるために、まだ悟っていないにもかかわらず『自分は悟った』ものと思いこんでいる者たちでした。この者たちは過去に積んだ徳が少ないため、教えを受け取る力が不足しており、最高の教えを受け入れることに堪えられない者たちでした。

※『増上慢（ぞうじょうまん）』『憍慢（きょうまん）』——

（そんなことは、『知ってる・やってる・わかってる』と思っている状態。またそういう人）。

【六五頁八行】（『此（かく）の如き失（とが）あり、是（ここ）を以て住せず』）そういう欠点・誤りがあるため、「もはや、釈尊の教えをこれ以上聞く必要はない」「この座にとどまる意味はない」という心が生じ、会座（えざ）から立ち去って行ったのでありました。

——【五千起去・ごせんきこ】

【六五頁終四行】（『世尊默然（もくねん）として制止したまわず』）この出来事は大変衝撃的な出来事でしたが、しかし世尊は沈黙されたまま、去りゆく者たちをお引き止めになることはされず、静かに見送られました。

そして、それらの者たちが立ち去るのを見届けられると、あらためて世尊は舍利弗に語りかけられたのでした。

【六五頁終三行】（『我が今此の衆は復（また）枝葉（しやう）なく、純（もっぱ）ら貞實（じょうじつ）のみあり。舍利弗、是（かく）の如き増上慢（ぞうじょうまん）の人は、退（も）くも亦佳（またよ）し。汝今（なんじいま）善（よ）く聽（き）け、當（まさ）に汝が爲（ため）に説くべし』）「幹ではない『枝葉』のような者はいなくなった。今ここに残っている者たちこそ『幹のような中心』の人たちで、『重大な教えを受け止める力』のある者たちばかりです。舍利弗よ。『増上慢』の者たちが去って行くのも、それはそれで良し。彼らにとっても良いことです。舍利弗よ。よくお聞きなさい。まさに今こそ、そなた達のために『真理』を説くことにします。よいですか。よく聞くのですよ」と世尊は語られました。

【六五頁終行】それを受け、舍利弗が答えます。

（『唯然（ゆいねん）世尊、願樂（ねが）わくは聞きたてまつらんと欲す』）「ただお一人の尊い世尊よ。どうぞ宜しくお説き願います。しっかりと拝受いたします」

【仏が『随宜説法(法を説き分ける)』理由。そしてなぜ仏が出生するのかの理由】——

【六六頁一行】世尊は、舎利弗に向かってお説きはじめになりました。

「これから説く『妙法』は、三千年に一度花を咲かせる優曇鉢華(うどんぼっけ)と同じように、巡り会うことが本当に難しい稀有(けう)の教えです。舎利弗よ。これから私が説く『妙法』を心から信じなさい。仏の言葉には偽(いつわ)りや誤りはありません」

【六六頁四行】(『諸佛の随宜(ずいぎ)の説法は意趣(いしゅ)解(さと)り難し』)「舎利弗よ。諸仏が説く教えというものは、相手の機根や時と場合に応じて適切な方法を用いて、説き方を変えたものです。ですから『真理』の本当の意味、真意というものをくみ取るのは難しいことです。真意はただ、諸仏のみが解るものです」

【六六頁六行】「なぜ私が、法を説き分けて『真理』を説くのかと言えば、それはほかでもありません。／(『所以(ゆえ)は何(いか)ん、諸佛世尊は、唯一大事(ただいちだいじ)の因縁を以ての故(ゆえ)に世に出現したもう。舎利弗、云何(いか)なるをか、諸佛世尊は、唯一大事(ただいちだいじ)の因縁を以ての故(ゆえ)に、世に出現したもうと名(なづ)くる』) ただ一つの重要な目的と意義のために、仏はこの世に現われたからにほかなりません」

——【諸仏出生の一大事因縁】

【仏がなぜ『真理』を説くのかの理由・目的】——

【六六頁七行】(『諸佛世尊は、衆生をして佛知見(ぶつちけん)を開かしめ清浄(しょうじょう)なることを得せしめんと欲するが故に、世に出現したもう』)「舎利弗よ。その『諸仏出生の一大事因縁』が何かと言えば、それは全ての人に仏の『智慧の眼を開かせ』、清らかな心と呼び覚ますために、仏はこの世に出現するのです」 **【開】**

【六六頁終三行】(『衆生に佛知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう』)「この世の一切は、例外なく『因縁の法則』によって成り立っているということを知らなければなりません。しかも、それぞれには『差別(差異)』があるように見えますが、しかしすべては『平等』であり、『仏性』を具えているのです。この、本来はそれぞれが『仏の智慧』を具えているのだということを『示す』ために、仏はこの世に出現したのであり」 **【示】**

【六六頁終二行】(『衆生をして佛知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう』)「そして衆生に仏の智慧を自らの体験によって『悟らせる』ために、仏はこの世に出現したのであり」 **【悟】**

【六六頁終行】(『衆生をして佛知見の道(どう)に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう』)「すべての者たちに、仏の智慧を成就する『道に入らせる』ために、仏はこの世に出現したのであります」 **【入】**

【六七頁一行】(『是れを諸佛は唯一大事の因縁を以ての故に、世に出現したもうとなづく』)「舎利弗よ。仏はすべての人に『仏の智慧』を得さしめるため、つまり、この『開・示・悟・入』というはたらきを行うために、この世に生まれ出でたのです」 **——【開・示・悟・入】**



ほうべんぽん 方便品の要点

(P255・1行/P193・1行)

この《方便品第二》は、《如来寿量品第十六》とともに、《法華經》の中心と言われている。～なぜでしょうか。

【**第一の要点**】は、釈尊は「人間は誰でも仏になれるのだ」という大宣言をなされたことです。すなわち〈一切の人間は一人のこらず仏性をそなえている〉ということを教えられたのです。そして〈仏の目的は、すべての人びとに、自分自身がそなえている**仏性を自覚**させることにほかならない〉ことをはじめて明かされたのです。

【**第二の要点**】は、これまで様々な方法で人々を導いてきた教えは、すべて真実だったのです。教えを聞く人びとの機根の程度にふさわしい教えを説いて～その人と環境と時代にふさわしい正しい手段をとることを〈方便〉というのですが～方便のようにみえても、それは真実の道なのです。～「方便が方便だった」と明らかにされたとき、はじめてそれがとりもなおさず「**真実の道**」だということがハッキリしてくるわけです。～その〈方便すなわち真実〉ということ言葉を尽くしてお説きになります。

しゃくもん ほんもん しゃくぶつ ほんぶつ ※ 迹門と本門 迹仏と本仏

(『第1巻』P84・7行/P54・4行)

○〈**迹門の教え**〉は〈**迹仏**〉の教え。〈**迹仏**〉とは、実際にこの世にお生まれになった釈迦牟尼世尊のことです。

ですから〈**迹門の教え**〉は一口にいて、——宇宙の万物万象はこのようになっている、人間とはこのようなものだ、だから人間はこう生きねばならぬ、人間どうしの関係はこうあらねばならぬということを教えられたものです。いいかえれば、〈智慧〉の教えです。

【序品第一～安樂行品第十四】

○〈**本門**〉では、本来仏というのは、宇宙のありとあらゆるものを生かしている宇宙の大真理〈大生命〉であるということを明らかにされます。

したがって〈**本門の教え**〉は——自分は宇宙の大真理である〈**本仏**〉に生かされているのだ。という大事实にめざめよ。というもので、〈**智慧**〉を一步超えた素晴らしい魂の感動、本仏の〈大慈悲〉を生き生きとを感じる教えです。〈慈悲〉の教えです。

【從地涌出品第十五～普賢菩薩勸発品第二十八】

ずいぎせっぽう 随宜説法

(P261・7行/P197・終2行)

すなわち〈方便〉によって（真理を）お説きになることです。方便の教えを聞いた人は、それによって幸福の階段を一段上ったことは確かなのですが、たいていそれで満足してしまうために、仏の真意がずっと上にあること（すなわち、すべての人を仏の境地まで引き上げたいという最終目的）に気がつかないのです。この『意趣（いしゅ）解（き）り難し』というのは～（真意を）理解しにくいというのではなく、〈気が付かない〉という意味です。

し むりょうしん 四無量心

(P265・2行／P201・1行)

- 【慈】— 人を幸せにしてあげたいと思う心。
【悲】— 人の苦しみを抜いてあげたいと思う心。
【喜】— 人の喜びを共に喜ぶ心。
【捨】— 人に施した恩も、人から受けた害も忘れ、一切の報いを忘れる心。

《し むい 患惟のひととき ①》

自分はこの【四無量心】を具えているか？ 振り返ってみましょう。特に『喜』（人の喜びを共に喜ぶ心）や、『捨』（人に施した恩も、人から受けた害も忘れ、一切の報いを忘れる心）を実践することができているか？ 如何でしょうか。

し ょ ぽ う じ っ そ う 諸法の実相

(P271・終6行／P206・2行)

宇宙のすべてのもののありのままの真実の相（すがた）。～ これを大きく分ければ、

- ①『すべてのものごとの、現象として現れている相（すがた）をありのままに観る』。
- ②『すべてのものごとの本質の相（すがた）を観る』の二つになります。

～ 『すべてのものごとの、本質の相（すがた）をみながら、現象として現われている相（すがた）をも、ありのままにみる』ことになります。～ 仏の立場からすると、すべては「大調和の世界（涅槃）」なのです。仏はそれを見極めて、われわれに示して下さいました。凡夫であるわれわれがそのように見ることができずに大調和しないのは、人間たちが小さな「我」をもってものごとを見、考え、行動するからであって、全ての人が「我」に執着する心を捨てて、ありのまま（如是）の心をもってすべてを見、考え、行動すれば、この世はこのまま涅槃の相になるのだと教えられているのです。

《し むい 患惟のひととき ②》

「大調和しないのは、人間たちが小さな『我』をもってものごとを見、考え、行動するからです。全ての人が『我』に執着する心を捨てて、ありのまま（如是）の心を持ってすべてを見、考え、行動すれば、この世はこのまま『涅槃の相』（大調和）になる」と開祖は説かれています。――

では、この一番難しい「小さな『我』を捨てる。また、『我』に執着する心を捨てて、ありのままの心を持って全てを見、考え、行動する」ためには、どのようにすれば良いのでしょうか？ ちょっと考えてみましょう。

じゅうによ ぜ 十如是

(P278・4行／P210・8行)

『唯^{ただ}佛^{ほとけ}と佛^{ほとけ}と乃^{いま}し能^よく諸法^{じっそう}の實相^{くじん}を究盡^{いっく}したまえり。所謂^{いわず}諸法の如是相 ～ 如是本末究竟等なり』 (五八頁 四行)
『諸の菩薩衆の信力堅固なる者をば除く』 (五九頁 三行)

《患^し惟^{ゆい}のひととき ③》

『十如是』の法門では、「性」があらゆる世界に現れていると説かれています。
—— そこで、今の自分の生活（家庭・職場など）を振り返ると、自分の「性」というものが、日常生活のなかで、どのように現れているか？（自分の「性」というものが、現象としてどのように現われているのか？） 振り返ってみましょう。

えんぎかん 縁起観

(P283・終5行／P214・1行)

全ての存在やそのはたらきは、因縁所生（因と縁があって生ずる所）のものであり、縁起（因が縁によって起こる）であるということができます。これがお釈迦さまのさとりの一大根本であり、すべての教えはここからでていっても過言ではありませんまい。これを「縁起観」といいますが、《諸法実相》の教えもこの「縁起観」が根本になっていることは、言うまでもありません。

いちねんさんぜん 一念三千

(P285・7行／P215・5行)

すべての人間は「平等な存在」であることは、『無量義經 説法品』でのべました。
ところが、現実の相として現われているものは、賢い人・愚かな人・心美しい人・心いやしい人等々、じつに千差万別であり～ はなはだしい上下の相違があります。そこで、「人間本来平等」であるということも真実であるけれども、現実のあらわれにおいて『不平等』であるということも真実であります。したがって人間をみるとときには、この『平等』・『不平等』の両面からみなければ、その本質はつかめないわけです。

ところが、もっと深く考えてゆきますと、その『不平等』というものは決して固定したものではなく、つねに流動しているものだということがわかってきます。～

ある条件（縁）にあえば、心いやしい人も心美しい人になることができ、逆に、不善の心や行為という因が、ある縁にあえば、幸福に満ちた人がたちまち苦悩のどん底に落ち込むこともありえます。～ 心の持ち方さえ変えれば、どの世界へも行くことができるのです。そういう可能性を、人間は平等に持っているのです。

ですから、目の前に見る『不平等』は、決して固定した『不平等』ではなく、自由に流動させることのできる『不平等』です。つまり、《『不平等』をどうにでもつくることのできる可能性を、みんなが等しく持っているところに『人間の平等さがある』》ということもできるわけです。

※「三千世界」とは、「十界互具」で百の世界を作り、その百の世界が「十如是」の法則に従って存在し、これによって千の世界を作り出します。これを「百界千如」と言い、これがさらに「三世間」に広がることにより「三千世界」を構成します。（「十界」とは六道と四聖界。「三世間」は五陰世間（人間関係）、衆生世間（社会）、国土世間（世界・自然界）。

《^{しゆい}患惟のひととき ④》

まず、現象をみるとき、「この『平等』と『不平等』の両面からみなければ、その本質はつかめないわけです。ところが、もっと深く考えてゆきますと、その『不平等』というのは決して固定したものではなく、つねに流動しているものだということがわかってきます」と説かれています。――

私たちはこの流動する『不平等』（差別・区別・違い）に、いつも心が引っかかり、思い悩むことが多いようです？ なぜでしょうか？ ちょっと考えてみましょう。

^{いちねんさんぜん}一念三千法門の功德

(P292・終5行／P219・終3行)

【第一の功德】 人間というものは上へ向かって進歩する無限の可能性を平等に与えられている。すなわち「仏」にまで向上する因子をみんなが持っていることがハッキリわかります。

【第二の功德】 その反対に、下へ墜落する可能性も十分にあるのですから、大切なことは少しでも「心を美しく」「善い行い」をしていこうとする決心を固めざるをえません。これが第二の功德です。

^じ事の一^{いちねんさんぜん}念三千

(P295・1行／P221・7行)

日蓮聖人は『事の一念三千』ということを宣言されたのです。

「理」は頭の中のことであるのに対して、「事」とは実際のものごとにあらわされること。いわゆる具体化されることをいいます。ひとくちに言えば「実践」と言うことです。

【事の一念三千】（日蓮聖人のいう『実践』、釈迦牟尼世尊の本懐）

まず自分の尊さ・尊厳を発見する。



ひいてはすべての人々の尊厳さを発見する。

すべての人々が仏になれる「素質」をもっていることを発見する。



世界の人間みんなが、それぞれの尊厳さを認め合い、仏になれる「素質」を磨き合って、寂光土建設にいそしむ。

ほうべん 方便についての三つの教え

(P316・2行／P238・8行)

1. 人生の大導師としての資格は、方便力を持っていること。
2. 方便は必ず真理につながるものである。
3. 人間は方便によらなければ真理を知ることでもできず、すべての修行は本当の涅槃につながる方便である。

さんしさんしょう 三止三請

(P336・7行／P256・1行)

なぜこうして再三「やめておいた方が良からう」とおおせになったのかといえば、ただ一同の覚悟を固めさせるためにほかなりません。～ しっかりした心構えをつくらせようという仏陀のお心づかいなのです。(P337・終2行／P256・終3行)

舍利弗の求道心と、お釈迦さまの〈真実を教えてやりたい〉というお気持ちとが、打てば響くように触れあって、ついにいよいよその大切な法門の説法が始まることになります。この舍利弗とお釈迦さまの劇的なやりとりを〈三止三請〉といい、法華經の教えがどんなに大切なものであるかを証明するものとして重大視されているわけです。

『止なん止みなん、復また説くべからず』 (六三頁 三行)

『世尊、唯願わくは之これを説きたまえ』 (六三頁 五行)

《患うれ惟いのひととき ⑤》

舍利弗は強い求道の心で、釈尊に教えを請い、願い出ました。それによって、釈尊は『法華經』を説かれました。もし、舍利弗のこうした強い『求道心』と言うものがなかったら、『法華經』は説かれることはなく、現在の私たちが、『法華經』に出会うということも無かったかも知れません。——さて、私たちの信仰姿勢で、はたしてどこまで強い『求道の心』があるのでしょうか？ みんなで振り返ってみましょう。

ごせんきこ 五千起去

(P340・終3行／P259・4行)

心の持ち方や行いに我がままをなくすれば、心が自然と素直になり、謙虚になり、どんな教えを聞く時も、自分を一応空っぽにして、その教えの良さを全部吸い取ろうという態度になるのです。

この「素直さ」と「謙虚さ(下がる心＝自分を空っぽにして全てを受け入れようという態度)」の二つこそ、正法を聞く者の基本的な心構えといわなければなりません。

『我が今此の衆は復また枝葉なく、純ら貞實じょうじつのみあり』 (六五頁 終三行)

《^{しゆい}患^{ゆい}惟のひととき ⑥》

大切な法華經を聞かず『五千起去』した者たちは、「増上慢」の人たちでした。「増上慢」とは、「憍慢」であり、それは「そんなことは知っている!」、「そんなことはやっている!」、「そんなことはわかっている!」という心を言います。

—— では、私の信仰姿勢で、この「知ってる。やってる。わかっている」ということがないか? またそれによって、大切な教えを学ぶチャンスを逃した『五千起去』するようなことは、これまでになかったか? 振り返ってみましょう。

《^{しゆい}患^{ゆい}惟のひととき ⑦》

『「素直さ」と「謙虚さ」が正法を聞く者の大切な基本的姿勢である』と、開祖はお教え下さいます。つまり、「素直さ」と「謙虚さ」こそ、信仰姿勢の基本であり、それは、「真の幸せを得る」ための大切な姿勢であると言えます。——

では、自分の信仰姿勢というものが、この「素直さ・謙虚さ」を基本的姿勢としているか? みんなで振り返ってみましょう。

^{かい}開・^じ示・^ご悟・^{にゆう}入

(P351・5行/P268・1行)

『諸佛世尊は^{ただいちだいじ}唯一大事の因縁を以ての故に、世に出現したもうと名くる。諸佛世尊は、衆生をして^{ぶつちけん}佛知見を開かしめ～ 衆生に^{ぶつちけん}佛知見を示さんと欲するが故に～ 衆生をして^{ぶつちけん}佛知見を悟らしめんと欲するが故に～ ^{ぶつちけん}佛知見の道^いに入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう』 (六六頁 八行)

^{かいぶつちけん}開仏知見

(P353・1行/P269・1行)

すべての人には平等に『仏性』がある。

^{じぶつちけん}示仏知見

(P354・1行/P269・終5行)

この世は「因縁の法則」によって成り立っており、そこにはいろいろの差別があるが、仏の智慧でみれば、すべて平等である。ということを示してくださっている。

^{ごぶつちけん}悟仏知見

(P354・7行/P270・1行)

この教えは自分の身に体験してみて、はじめてなるほどと本当に悟ることができる。

仏の智慧というものが、なるほどこんなに素晴らしいものなのかと悟った人は、その智慧を成就したいという心を起こすのが当然ですから、仏はその成就の道に引き入れて下さるのです。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑧》

果たして私は「仏知見・仏の智慧」を得たい！と思っているのか？ 振り返ってみましょう。（私の信仰の目的は、『仏の智慧』を得ることである』となっているか？
いかがでしょうか？）

《^{しゆい}思惟のふいかえり まとめ》

今日の『方便品第二(前半)』を通して、何を学び取られましたか？
そして「何を実践・実行しよう」と思われましたか？
振り返ってみましょう。（何を一番印象深く感じ、受け止めることができましたか？
また、具体的に何を実践しようと思いましたか？）

以 上